

フジマリモについて

安原 健 允*

Takenobu Yasuhara: Notes on the Fuji-marimo, *Cladophora sauteri* var. *yamanakaensis* in Lake Yamanaka, Yamanashi Pref.

富士五湖の一つ、山中湖でまりもが発見されたのは、昭和31年4月16日のことである。その経緯は杉浦(1956, 57)に詳しい。4月22日にフジマリモ(富士毬藻)として発表された。そして、岡田(1957)が学名を *Aegagropira sauteri* var. *yamanakaensis* OKADA フジマリモとして記録され、山梨県は天然記念物に指定(昭和33年)した。其の後学名は、坂井(1964)によって *Cladophora sauteri* f. *kurilensis* (NAGAI) SAKAI エトロフマリモと同じとして、和名をチシマリモとされた。しかし、広瀬ら(1977)は、フジマリモだけに *Cladophora sauteri* var. *yamanakaensis* OKADA を使用し、*Cladophora sauteri* var. *kurilensis* (NAGAI) SAKAI はチシマリモとすると記している。フジマリモは、その後隣の河口湖でも発見され、昭和58年に山梨県の天然記念物に指定された。

筆者は、昭和32年に山中湖で採集された標本をもとに昭和33年から研究を始め、以後、フジマリモと山中湖の移り変わりをまのあたりにしてきた。山中湖は急速に観光開発、リゾート化が進み自然環境の保全、ひいてはフジマリモの生育地の保護などが後手になって、現在は生育環境の荒廃が種の維持に危機感すらよんでいる。湖上遊覧の観光船、モーターボート、水上スキー、ジェットスキー、などが生育地の真上にやってきて、湖底の水草を痛めている。

フジマリモは湖底から離れると、水草の間であって浮き沈みして、この間に球団化が進むものと思われ、昭和30年代末頃までは嵐の後にマキノ森から長浜にかけて時に球団のフジマリモが大量に打ち揚がっていた。

フジマリモは緑藻類シオグサ科で糸状体によって球団が形成されているが、仮根によって核となる火山礫に固着している。他に木材や枯れた木の根、草に仮根を下ろ

している団塊もある。大きなものでは長径3~5cmほどの球団もある。また、大きな火山岩の表面にマット状またはこぶ状に生育している団塊もある。

フジマリモの繁殖は糸状体または節間細胞や先端の細胞が千切れて、これが火山礫などに固着して成長するものと考えられる。しかし、阿寒湖マリモの遊走子を西村ら(1927)、藪(1975)が、また新崎(1955)、安原ら(1976)は芽胚による繁殖を報告しているので、フジマリモでも遊走子による生殖法が考えられ、筆者(1984)は節間細胞内に形成初期の胞子状のものを観察した。

現在の山中湖は、湖岸から周囲の山の傾斜地にホテルや民宿、保養所などが建ち並び多くの人の集まる所となっている。主として生活排水の流入によって富栄養化した湖は、大型の水草、クラゲコケムシ(オオマリコケムシ) *Pectinatella magnifica* の異常繁殖、釣道具店よって放流されて以来大繁殖している外来種のブラックバスなどが現在の山中湖を象徴している。

世界的にも貴重な淡水産緑藻類のフジマリモの保護、湖沼環境の保全を真剣に考えるには遅きに失しているかもしれない。近年2~3の地でまりもが発見されているが、マリモやフジマリモがこれらのまりもとどのようなかわりがあるのか、今後に残された課題に興味は尽きない。

文 献

- 新崎盛敏(1955) マリモの球団形成と繁殖に関する観察. 科学 25(5).
 広瀬、山岸編(1977) 日本淡水藻類図鑑. pp.328-333、内田老鶴圃新社.
 西村真琴・菅野利助(1927) 毬藻の研究 特に遊走子の発達について. 水産学雑誌 30:1-8.
 K.OKADA(1957) On a New Variety of *Aega-*

* 日本大学商学部一般教育生態学研究室

- gropila sauteri* Found in Lake Yamana, Bul. Fac. Fish., Nagasaki Univ.5
 齊藤省吾・安原健允(1959)阿寒湖マリモ、山中湖のフジマリモに関する二三の考察. 青葉学園生物学教室報告 1-10.
- Y. SAKAI (1964) The Species of *Cladophora* from Japan and its Vicinity. Sci. Papers Inst. Algo. Res. Fac. Sci., Hokkaido Univ. V(1) : 1-140.
- 坂井与志雄(1980) 河口湖産フジマリモについて. 藻類 28(1): 47-50.
- 杉浦忠睦(1956) フジマリモの発見. 採集と飼育 18(9) : 258-259.
- (1957) 山中湖産フジマリモ. 生物研究 3(1).
- (1988) 山中湖村の自然. 山中湖村教育委員会.
- 安原健允・新崎盛敏(1975) マリモの団塊形成と繁殖について. 日大文理(三島)研究年報 24:27-34.
- ・————(1976) 日本に産するマリモの研究 VII 山中湖産フジマリモについて. 日大文理(三島)研究年報 25 : 9-14.
- 安原健允(1978) マリモ. 世界の植物 113 : 2657, 朝日新聞社.
- ・新崎盛敏(1980) 日本に産するマリモの研究 IX 河口湖産および再び山中湖産フジマリモについて. 日大文理(三島)研究年報 28:101-112.
- (1984) 日本産マリモの研究. 日大生活科学研究報告 7 : 81-158.
- (1986) 富士五湖の生物-山中湖の水生生物. 日大文理(三島)研究年報 35 : 121-130.
- (1987) 日本産マリモ総説. 日本の生物 1(9) : 48-56.
- 藪 熙(1975) マリモの遊走細胞形成. 藻類 23(1).

○岩槻邦男編著『滅びゆく日本の植物50種』(築地書館, 1992年11月, 212p., 2060円)

動物・植物のレッドデータブックの出版や地球サミットで生物学的多様性の保全が議題に取り上げられたことを契機に、絶滅危惧種に対する社会的関心が高まっている。それに呼応するように、この問題を扱った一般書の出版が昨年从今年にかけていくつか計画されている。本書もその一つで「絶滅の危機に瀕する日本の植物」という編者の総説の後、50種の絶滅危惧種を取り上げ、イラストと解説がある。どのような原因で種の存続が脅かされているのかがよくわかる。

水草ではデンジソウ、ミクリ、ヒメイバラモ、カワゴケソウ、オニバス、フサタヌキモの6種が取り上げられている。巻末には「日本版レッドデータブック植物編」にリストされた全種が一覧表として挙げられているので、同書をお持ちでない方には参考になる。

○『小田の池自然環境学術調査報告書』(大分県保健環境部発行, 1992年3月, 136p.)

小田の池は大分県湯布院町にある高原の自然湖沼である。九州では珍しいミツガシワ(日本の南限)やコタヌキモなどが自生する。すぐれた自然環境が維持され、周辺の湿原とともに学術的にも貴重な自然となっている。しかし、ここにも開発の波が押し寄せようとしている。今回の報告は、このような実情も鑑みて実施されたもので、気象や地形から生物相全般におよぶ総合的なものである。植物は本会会員の荒金正憲氏らが中心となって調査を進められ、その結果は「小田の池及び周辺地域の植生とフロラ」と題する30ページあまりの報告にまとめられている。群落の分類、植生図、植物目録などから

(角野康郎)